

留学先大学：BESIGN The Sustainable Design School 大学

氏名：篠田泰成

-
「私は日本文化が好きだ。理由は分からない。ただ私の中の美的感覚がそう言っているんだよ。」

-
これどこかで意図的に身につけた覚えもなく、きっと DNA にでも刻まれているのだろうと、昔誰かに教わった気もする。それなら、海を越えた場所ならどうか。日本人の DNA を持たない人間がいたとして、それをどこまで真に感じるができるのだろうか。

今日のテーマは詰まるところそんなものである。これは事実に基づく昔話。これを読みながら日本文化についてもう一度深く考えてみてほしい。

-
先日、とある教授から日本文化について簡単な授業をしてほしいとの要望があった。私は遠慮がちに恐縮して魅せたが、結局一年生の History of Design という講義で 30 分ほど時間を頂き、日本文化とデザインの歴史について簡単な授業をした。内容は要約すると以下の通り。

- 「間」と「侘び寂び」の歴史と考え方
- 東京五輪以降のデザイン運動とデザイナー
- 建築（気候と住まい方による建築様式）

相手が 1 年生だったということもあり、日本文化に精通した生徒は 1 人もいなかったが、授業は思いのほか好評だった。私が思うに、やはり価値観の違いに由来するギャップと日本文化に対する空虚なイメージへの崇拝が理由であろう。後者はやはり偏見として受け取ることもできるが、それだけ興味を持ってくれるという事実にはまず感謝すべきである。そしてまさにそのような現状だからこそ、日本の DNA を持った日本人が自分たちの文化を語ることに意味があるのだと思うし、私に依頼した教授もやはり同じ考えだったのだろう。

-
授業の導入は質問から始めるべき、というのが私なりの美学である。

-
「なんでもいいから知っている日本語はあるか」

「では、デザインに関する日本語で知っている言葉はあるか」

私は 2 段構えの質問を導入として想定していたが、結果からして 2 つ目の質問をすることはなかった。

「なんでもいいから」という 1 つ目の質問の時点で、「Bonsai」というなんとも模範生のような解答があったからだ。「ありがとう」とか「おはよう」とかを期待していた私からすれば、確かにそれは想定外であったのが、それはそのまま侘び寂びの話への糸口となり、導入部分は呆気なく終わった。

-

思い返すとヨーロッパのホテルエントランスには盆栽だと思われる Bonsai が豪華で煌びやかな装飾と共に展示されていることが多い。これこそが日本文化に対する空虚なイメージへの崇拝を体現する根源的存在であり、偏見の良い例なのだろうと思う。とかく Bonsai とか Japanese Garden とかは海を越えた場所で、形を変えた日本文化として成長と進化を遂げている。

-

「なんでもいいから明確な国旗を 1 つ思い浮かべてほしい」

「では、あなたがその国を何よって認識しているか考えてほしい」

さて、それはその国を代表するソウルフードか、あるいはその国を舞台とした映画か、それとも歴史的な音楽か大衆向けのアイドルか。いちいちを分類するのが面倒なほど複雑な要素からその国の空虚なイメージは連想され、認知され、最終的には理解されるわけだが、これらの数え切れない要素を一言で現した存在、つまりはその空虚なイメージへの崇拝こそが紛うことなき“文化”の正体なのである。

-

実は私の学校は 28 の国籍から構成されている。いわゆる多文化社会というやつだ。そして誰でも海外の人間は、大体の日本人は他人を尊重する謙虚な性格であるはずだと言う。これは驚いた。意外と的を得たことを言うではないか。ただ消極的なだけなのではないかという言葉が脳裏をよぎりもしたが、それを言ったとてその発言が謙虚であってどうする。だいたい、日本人は謙虚であると言われて否定する気にはなれなかった。

我々日本人からすると自分が謙虚に振る舞う具体的な理由は答えられずとも、少なくとも文化的な背景に由来するものであろうことは容易に想像がつく。侘び寂びを代表する非装飾文化すらも、無や空、あるいは間に美意識や時間的な意味を見出している。つまりは謙虚であるという性格的な文化と物質的な文化には強い結び付きがあるということである。

しかしどうだろう。ヨーロッパのホテルに行けば彼らは盆栽を謙虚どころか、華やかな装飾で飾ってみせる。これでは結び付きどころかむしろ彼らが理解しているはずの謙虚という性格的な文化からは乖離している。性格的な文化と物質的な文化をあえて比べれば、物質的な文化の方が簡単に伝わりそうなものであるというのに。

これはあくまでも私の予測によるものだが、華やかな装飾で飾られた Bonsai にも、華やかでない時代はあったのだと思う。初めは全てオリジナルな盆栽として伝わった。しかし時の中で、オリジナルはオリジナルでなくなっていく。色を塗り替えるまでのことはせずとも多少の加筆ならば許されてしまう。異文化に対する尊重とはその程度なのであろう。

-

-

私が授業で取り上げようか前日まで迷い、結局は諦めてしまったもう一つの日本文化がある。
それが無常観である。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず…

川の水は絶えず流れ続けるが、しかしそれは二度と同じ水であることはない。ここに人生の儚さを感じてしまえばなんとも日本的で文化的だ。しかし私が中学の頃、廣田先生による方丈記の授業でこれを真に理解することはなかった。廣田先生の授業を悪く言うのではない。むしろ私は彼女の授業が大好きだったし、国語の成績だって悪くなかった。ただ一重に、絶えず変化する美しさと言われれば、私は長く変わらない強さを信じたかっただけなのだ。

私が無常観を取り上げなかった理由は大きく2つ。1つは無常とは一般的に死を代表するネガティブな理を意味し、あまりに仏教的解釈が強すぎると感じたからだ。国によってはそれをタブー視するかもしれないと危惧したからだ。

そして2つ目が、私自身が未だに無常観による日本文化を真に感じる事ができていないと思うからだ。私は先も、加筆により変わりゆく Bonsai とオリジナルの盆栽を対比し、後者を強く鼻負した。私の考えは無常観を否定してしまっているのだろうか。実はこれに対する明確な答えは私の中で既に存在している。例えばクラスの誰かが無常観に対する質問でも一生懸命にしてくれたのなら、私も廣田先生のようなあの素晴らしい授業をすることもできたかもしれないと密かにかつての記憶に思いを馳せていたのだが。

-

とどのつまり、文化とは所詮そんな程度の理解しかされていないということである。私が授業をしたとて彼らは Bonsai を盆栽に改めることはしないし、我々も実はそれをそこまで望んでいるわけではない。文化を理解することと感じる事には圧倒的な違いがある。方丈記の期末テストで満点を取るのに、無常観を感じる必要はないのと同じ理屈である。ほんの少しの DNA が違えば、それだけで不可能というのはそれこそ理解し難いものであるが、感じるというのはそういうことだ。

繰り返すことになるが、Bonsai という回答は本当に模範だったと思う。本質から目を背けている訳ではない。ただそこに尊重と偏見が重なって存在しているだけだ。空虚なイメージへの崇拜はなにも根拠がないから空虚と言っているのではない。それに対する必要な拘りや執念心が欠けていることを意味している。憧れはあっても責任はなく、リスペクトはあっても誇りはないのである。

海外の日本食レストランを和食屋と呼ぶには日本人としてやや抵抗があるのではないだろうか？
帰するところ、まさにそういうことである。

-

「私はまるで無常観に反した考えを持っているようですが、これはおかしいことですか？」
今考えれば、あれが私の人生で初めての授業だったとも思う。授業といっても、チャイムの後に教卓の方へ走って行って、方丈記の板書がされた黒板を指さしながら廣田先生に自分なりの価値観を一生懸命に説明しただけなのだが。

廣田先生は僕の話の延長するようであった。
流れるように今度は先生が僕にこんな授業を始めた。

-

「私は日本文化が好きだ。理由は分からない。ただ私の中の美的感覚がそう言っているんだよ。」

-